

## 私たちの伊勢原と戦争

伊勢原中学校 細貝 心音

私の住んでいる伊勢原には大山という山があります。今、この山は緑が生い茂っていて観光客も訪れる大きな神社もあります。ですが少し神社の奥の方に行くと2人の子供がどこかを指差している像が建てられていました。私はそれがなんなのかが知りたくなりインターネットで調べました。するとそこには第二次世界大戦で疎開した子供たちのお話に関係していました。

その当時子供で疎開して来た方々の想像を絶する話がありました。かつて伊勢原は集団疎開先として神奈川県のみならず関東各地から子供達が集まっていた。私はこの話を読んで「伊勢原は安全な場所だったんだ」と思っていました。ですが決して伊勢原が安全な場所というわけではありませんでした。それはたとえ疎開しても安全のためではなくご飯を多くもらえるわけではないが、ないわけでもないという「ギリギリの状態を過ごしていたんだ」と思いました。そしていつ終わるのかも分からず精神が削られていき子供心に「戦争に勝つ」という気持ちがどんどん強くなっていきどんどん人の命の重さの感じ方が変化していったのではないかと思います。

伊勢原に疎開して来た方々のインタビュー記事を見て、今では信じられないような話が載っていました。それは死との近さです。その例としてこのような話がありました。「気づいたら知人が銃に撃たれて亡くなってしまっていた」や「私の頭上一メートルを銃弾が通った」、「爆弾で1人の子供が亡くなってしまった」という話が載っていました。死が遠い戦場にあるものではなくすぐ身近にいつ来てもおかしくないものとなっていたのです。私の周りには戦争に行ったことのある人はいなかったのですがテレビやインターネットのインタビューを見ると「その時は人を殺さないといけない状態だったが今でも心に傷を負ったままの人がたくさんいることを知りました。

今でも大山には戦争で爆弾が落とされ犠牲者が出てしまったことから「輝け杉の子

像（川崎市学童疎開記念碑）」が建てられ戦争から80年以上経った今でも校外学習などでその当時の話を聞くことがよくあります。

私が小学生の時はただ記念碑があるとしか思っていませんでした。でも実は犠牲になってしまった方、疎開先だった事の記念碑でそれが今、私たちの時代にも残っていて戦争という悲劇が世界の中ではまだまだ起こっています。いつ日本で起きてもおかしくない世の中だからこそ、小さな口喧嘩でもただ怒こるのではなく自分が何が嫌だったのか、「当たり前のようなことだけどひとつひとつの行動に気をつけること。」「昔の日本のしたことを忘れるのではなく真摯に受け止め、心に傷を負った人、負わせてしまった人の事もその人が背負っていくのではなく次世代を担う私たちも一緒に背負い助け合うこと。」「当たり前を当たり前と思わないようにするのはとても大変なことだけど、今あるこの平和で色々な人から守ってもらえている日々感謝しながら生活すること。」私にできることはごく小さなことかもしれないけど自分の気持ちや考えを自分の言葉で、自分の口から相手に伝わるように小さな言動も意識してこれから生活していくのが大切なのではないかと思った。